

地域で生活する障害者を応援する
「からしだね館」の旬な情報をお届けする機関誌

VOL.54

2020

からしだね通信

12

1. お知らせ
2~6. インタビュー
【本にまつわるあれこれ...坂岡理事長に】
6~7. センター報告・ワニクス報告
8. 編集後記

コロナ禍で、4月から店を閉じていたカフェ・トライアングルを、ブックカフェとしてリニューアルオープンいたします。どうぞよろしくお願いいたします。
今回のからしだね通信は、書店スタートを前にして、やや興奮気味なミッションからしだねの空気を、そのまま皆様にお届けしたいと思います。

書店を開くことになりました。 ミッションからしだねは、来春

書店を開くことになったわけは...

京都の中心地でキリスト教書やグッズを販売していた書店、CLC 京都店が、今年いっぱい閉店するというニュースを耳にしたのは、今年秋のことでした。キリスト教関係の本をあつかう数少ない書店として、知る人ぞ知るお店です。
ちょうどその頃、からしだねでは、コロナ禍で閉店していたカフェ・トライアングルのリスタートに向けて、思案の真っ最中でした。10月4日、理事長・坂岡の頭に、ふと「CLC 京都店をからしだねで引き継がないだろうか？書店の仕事をカフェの仕事とからめれば、障害のある人たちの就労支援事業として成り立つのではないか？」という考えが浮かびました。
役員、職員の「大賛成！」の声を追い風に、CLC 京都店の店長森下さんの前で「うちにやらせていただけませんか？」と、手を挙げたところ、「どうぞやってください。全力をあげて協力しますよ」とのあたたかなお返事をいただきました。
「素人が何を言っているのですか？」と言われることも覚悟していたのですが、CLC 京都店をはじめ、本の取次をしてくださるいのちのことば社や日本キリスト教書販売の皆様の力強いご協力をいただいて、書店のバトンを受け取ることになったのです。

どんなお店になるか というところ...

- ①キリスト教書をメインとする宗教書のほかにも、福祉、心理、精神、哲学、児童書など、人の暮らしや生き方、こころのありよう、人と人のかかわりについてなど、**ゆっくり考えたい人のための本**をたくさん揃えたいと思います。
- ②お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチ等をご用意しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④もちろん、**コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。**
- ⑤図書コーナーも併設します。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- ⑥古本の販売もいたします。
- ⑦読書会や著者を招いての講演会など、**人と人が出会い、つながる「対話」の場**を提供したいと考えています。

**= オープン予定 =
2021年3月初旬**

2月にはプレオープン期間をもうける予定です。
月刊誌の発送は2021年1月から対応いたします

店名 = CLC からしだね書店
& カフェ・トライアングル
運営・経営 = 社会福祉法人 ミッションからしだね
就労継続支援 A・B 型事業所 からしだねワークス
書店 TEL = 075-574-1001 (21年1月より)
FAX = 075-574-0025
店 = clc@karashidane.or.jp



「書店」「本屋さん」と聞いて、皆さまはどんなことを思いうかべますか？
マンガの発売日にお小遣いを握りしめて走った商店街の風景。
お気に入りの作家の新作が待ち遠しかったこと。

仕事帰りにふらっと立ち寄った本屋さん、そこで見つけたとっておきの一冊…。

日常生活の中に、あたりまえのように存在していた町の小さな本屋さんは、
いったいどこへ行ってしまったのでしょうか。本を探すのも買うのも、

インターネットが中心になり、個人経営の書店だけでなく、

大きな書店でさえ、経営は厳しくなっています。

ですが、ちよつと待ってください。インターネットでは味わえない、
リアルな書店の良さもあるはず。

「書店」が頭の中に突如ひらめいてしまった、

本が大好きなミッションからしだね坂岡理事長に、そんな「書店」や

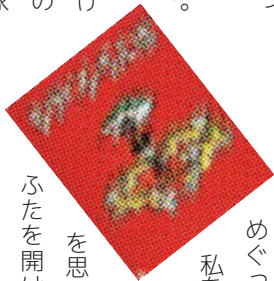
「本」のあれこれについて、からしだねのイメージキャラクター、

からしちゃんが登場インタビューしました。

**本好きになったきっかけは、食いしん坊
な子どもだったから**

からし「理事長、今日は、からしだねが『書店』
をすることになって、うれしくてたまらない理事
長に、ねほりはほり聞くので、よろしく願いま
す。まずは、子どものころのことから聞いてみ
ましょう。ずばり、さかおかたかしくんが好きだっ
た本は？」

坂岡理「はい、それは『ちびくろサンボ』です。
サンボをとって食べようとしていたトラたちが、
輪になって猛スピードでグルグル回ったら、溶け
てバターになっちゃった。そのバターでサンボの
お母さんがホットケーキを焼いてくれました。家



族みんなであらうく食べました、というお話なん
だけど、トラが溶けてバターになる場面の絵がす
ごく好きでした。それからホカホカのホットケー
キ。よだれが出るほど美味しそう。いたずらっ子
で泣き虫で食いしん坊の主人公は、すぐ魅力的
でワクワクしました。その後『差別的な表現』を
めぐって、物議をかもした本なんだけど、
私を本好きにしてくれた本でもあります」

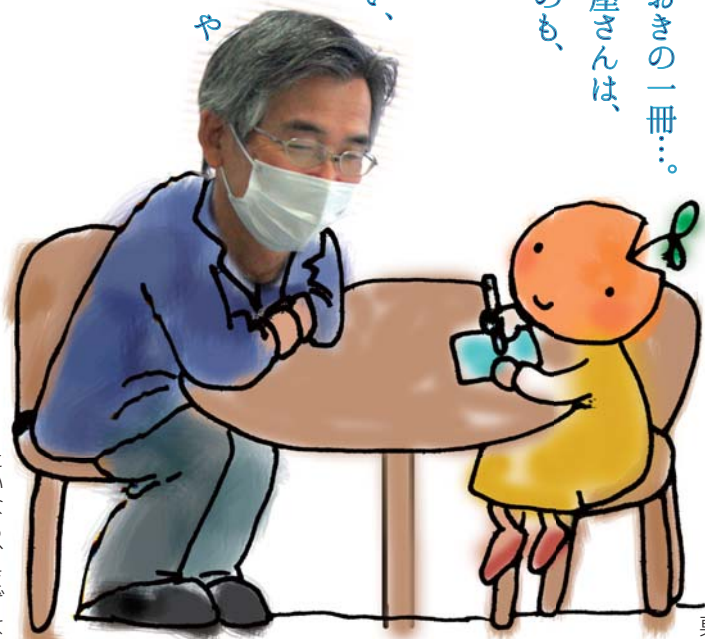
からし「あ、ホットケーキと言えば、

わたしは『ぐりとぐら』のカステラ

を思いだすな。大きなフライパンで焼いて、

ふたを開けたらぷくぷくとふくれたまるとい

黄色のカステラ。ホットケーキっぱいんだけど、



カステラ。おみやげでしか食べられない高級なお

菓子が家でも作れるんだ、という

うれしさもあったような…」

坂岡理「子どもたちは、絵本

のなかでホットケーキやカ

ステラができたあがっていくの

を、登場人物と一緒にワクワク

しながら見ているでしょ。

だからできあがったお菓子は

よだれが出るほど美味しそ

う。いいなあ、美味しそうだ

なあ、ばくも食べたいなあ、

と。さかおかたかしくんなん

かは、絵本の中のホットケー

キを、指でつまんでむしゃむ

しゃ食べていました」

からし「こどもを本好きにし
たいなら、まずは、美味しそうなのが、いかに
も美味しそうにかかれていた本を読んであげるの
が一番かもね」

町から本屋さんが消えていったのは…

からし「町の本屋さん、最近あまり見かけな

くなっただけ、どうしてなの？」

坂岡理「みんなインターネットで検索して、ア

マゾンとかで買うようになったからね」

からし「それはそうだけど、それは本に限ったこ

とじゃないでしょ。なんで本屋さんだけが消えて

いくの？」

坂岡理「これは私も、いろいろ勉強して初めて知っ
たことだけど」





からし 「はー」

坂岡理 「本の値段が 1000 円だとしたら、書店は本をいくらの値段で仕入れると思う？」

からし 「さて…？どれくらいかな？」

坂岡理 「およそ 800 円。つまり、粗利は 200 円ということ」

からし 「えーっ？飲食店というところ、お客さんから 1000 円の飲食代をいただきました。材料費を引いたら、いくら残りますか？というのが粗利でしょ？」

坂岡理 「はい。飲食店の場合は、粗利 700 円くらいを見込むものなんだよ。その粗利から、家賃、光熱水費、人件費などもろもろの経費を捻出する。飲食店なら粗利 700 円、ところが書店の粗利は、たったの 200 円。」

からし 「本が本屋さんでしか買えなかった時代、町の本屋さんには、それでもちゃんと成り立ってたんだね。利益が少ない分、ものすごくたくさん数の本を売ってがんばってたんだね…」

坂岡理 「うちの息子が中学生の頃、本屋に行ったら、おじさんがハタキを持って後ろをずっとついて回る。中学生だった息子は、『オレは万引きなんかしいひんの！あの本屋には二度と行かへん！』と怒ってた。でも、今考えると、本屋のおじさんは常日頃、中学生の万引きに頭を悩ましてたんだね、きっと。1000 円の本を一冊万引きされたら、粗利どころか、800 円まるまる大損。それを放置していたらつづけるよね。だから万引きしない中学生まで疑って、ますます客足は遠のく……」

からし 「なんとも、つらい、せちがらい話…。万



引きはダメ！絶対ダメ！ですね。からしだねが書店をやっているのか、すごく心配になってきたけど、大丈夫なのかな…？」

坂岡理 「幸い、うちの場合、家賃はいらない。職員の人件費も施設会計から出る。水光熱費は、からしだね館全体にかかる経費で分け合うので、経費の中で大きなウェイトを占める部分はかなり削減できます」

からし 「今年はコロナ禍で、就労支援事業収入がぐんと減って、利用者さんたちの工賃にも影響が出てます。きれいごとではすまないいで、理事長、ずばりお聞きします…！儲からないはずの書店で、どうやって儲けて、利用者さんに工賃払うおつもりなんですか？」

坂岡理 「もちろん、本はたくさん売りたいよ。薄利多売で。そのほかに、カフェや印刷部門とコラボして様々な仕掛けを考えたいです。相乗効果を期待しています。そのためには、利用者の皆さんにもしつかり働いていただかないとね」

からし 「たとえば、どんなことを考えてるの？」

坂岡理 「そうだねえ。たとえばだけど、『からしだね印刷部門で自費出版本作ってくれた人の本は、一定期間、平積みで並べて委託販売しますよ』とか、『本を買ってくれた人は、カフェの飲食を割引価格で提供しますよ』とか、お得な情報をいっぱい流して、お客様を引き寄せたいと考えています。からしだねワークスには、プロ並みのセンスと腕を持つ、ものづくりの達人もいるので、おしゃれな雑貨やグッズを作って売りたい。古本フェアなんかもしたい。読書会やトークイベントもやりたいね」

からし 「夢と妄想は、果てしなく広がりゆくって



感じだね。そのほかには？」

坂岡理 「キリスト教書のことをよく勉強して、キリスト教書店から遠いところにある地方の教会を回って、本の外販もできたらうれしい…。ここはちょっと、儲けは度外視というところもあるんだけど…、地方の教会の牧師さんや信徒の皆さんと交流したいです。これ、私のあたたためる夢です。からしだね館のマスコット犬でもある、私の愛犬デブも連れて行くかな。車中泊とかで」

からし 「出たっ…理事長の溺愛犬デブ。まあ、そこは理事長、好きにやってくださいって感じですよ。からしだね館の誰も、もう文句は言わないでしょう。…えっと、書店でできることなら、なんでもやるぞ、という意気込みは伝わってきました。やることはたくさんありそう。ただ、職員と利用者さんだけで、全部の仕事をこなしていくことはできるのかな？」

坂岡理 「そこなんだよね。職員と利用者だけでは手が回らない仕事を、からしだね通信前月号に登場した外国人支援の NGO シナピスにもお手伝いしてもらおうと考えています。そのほかにも協力し合える人たちは、どんどん協力しあって、からしだねだけでなく、みんなが仕事を分け合い、それでみんながちゃんとご飯を食べていける、そういう仕組みを作りたい。そのためには、たくさん稼ごう！この通信をお読みの皆さま、是非ともからしだね書店に足をお運びください。そして、売上にご協力ください」

からし 「からしちゃんからも一言。皆さまがからしだねに来てくださること自体が、ものすごく強力なボランティア活動なのです！よろしくよろしくお願いします！」



書店の文化的価値。お手軽さ、便利さもいいけれど、大事なものを手放さないからし」とところで、あえてシビアナ話をします。

ネットで申し込めば本は家まで届く。電子書籍なら、読みたい本がすぐ読めるし、場所もとらない。とってもお手軽で便利。そうすると書店なんかなくともいいんじゃないかとさえ思ってしまうんだけど、理事長、その点はいかがでしょう？」

坂岡理「いやいや、こういうお手軽な時代だからこそ、書店は必要なんです。書店は、活字文化の発信の場。人権、言論・表現の自由の拠点。大げさかもしれないけど、自由や平和の砦としての役割を、都会でも田舎でも、普通の町の一角で、さりげなく地味に担ってきた歴史を持っています。そこに、本を読みたいごく普通の人達がお客さんとしてしょっちゅう出入りしてきた。それにはすごく大きな意味があります。香港の民主化運動で、書店や出版社が一番に目をつけられたことからわかるよね」

からし「香港の人たち、大事なものを、命がけで守ろうとしているね」
坂岡理「それと、今の時代、あまりにもデジタル化が進んだせいで、いわばグレイゾーンが無くなったように思う。デジタルって、0か1、2か3でしょ。でもじつは、その中間こそ大事なんだと思う。それと、これはコロナで気づいたんだけど、人間にとって身体性というのがある、つまりリアルな生活感というのは、オンラインでは届かない。アナログの深みです。じつは書店というのは、そういう割り切れないものを備えた、豊かであたたかい場なんだと思う」



からし「たしかに…。グレイゾーンですね。そこがそぎ落とされたら、薄っぺらな人生になっちゃうかも」

坂岡理「そう。それからもうひとつ。書店は、開かれた対話の場にもなる。最近ネットなんかで言葉が溢れています。でも、ほんとうの意味の対話は少ないのでは？先日のアメリカ大統領選挙でもそう。言いつばなしで、すれ違えばかり。分断や対立だけが大きくなる。だからこそ、ほんとうの対話って大事なんだ。対話があつてこそ人は共生できる。その先に福祉もある。書店は、対話の文化を育む、とても貴重な場になるように思うんだ。」
からし「いやあ、理事長の話、熱くなってきた……」

坂岡理「はい。熱いんです。今は、熱くならないといけない時代だとさえ思っています」
からし「ふむふむ。それはなぜ？」

坂岡理「あるダウン症のお子さんを持つお母さんの体験談をお話しましょう。お子さんをスイミングスクールに通わせたいと電話したら、『うちの子ダウン症なんですけど…』と言いかけたとたん、ぴしゃりとお断りされたというんです。お子さんの状況を聞くこともなく。そのお母さんがおっしゃった言葉は、私が熱くならないといけない時代だと考える理由を、的確に表しています。そのまゝ紹介するね。」

『今の平和な？日本では、マジョリティは、ひとの人権も自分の人権も意識して守ろうとしなくてもフツーに生活できていると思います。それって幸せなようで、裏を返せば実はとても怖い。知らず知らずのうちに、権利を薄くされ、気づいたら戦争に駆り出されてたなんて事もあり得ると思う私は妄想が過ぎるでしょうか？』



からし「このお母さんは、フツーの権利が、いつもいつも、そしてちよつとずつ、ちよつとずつ、暮らしの中で損なわれていると実感しておられるのかな。そして、自分がマジョリティだと思っている人達に向けて、警鐘を鳴らしている。他人ごとではないんですよ、って」

坂岡理「便利でお手軽なことが全部ダメということではないんだけど、ただ、それに慣れきつてしまつと、手間暇かけて大事に守っていくべきもの、意識していないと、少しずつ奪われていくものがあることを忘れてしまふ。だから私は意識して熱くなるようにしているんです」

からし「なるほど。理事長の熱さの源はそこなんだ。そして、それは、書店の文化を忘れてはいけないというところと、つながってる」

坂岡理事長のおすすめ本『1984年』

：言葉を「軽んじる、憎む」世界は怖いだから、良質な言葉にたくさんふれよう

からし「ところで、今、何かおすすめの本はありますか？」

坂岡理「そうですねえ、このタイミングで紹介するとしたら、ジョージ・オーウェルの『1984年』かな。これは、今から70年ほど前に書かれたたいへん怖い小説です」

からし「怖いって、ホラーとか？わたし、ちよつと苦手なだけだな」

坂岡理「ホラーじゃないけど、じつは、ホラー以上に怖いかも。テーマは、言葉を意図的に軽んじ



ると、世界はどうなってしまうのか？ってこと。
あくまでもわたくし流にまとめると、ですが」

からし 「ホラーじゃないなら、どんな話が聞きたい」

坂岡理 「近未来1984年、架空の巨大な全体主義国家の話です。と言っても、2020年の今からすると、1984年はずっと過去になってしまったんだけど。その国の三大スローガンがすごい。『戦争は平和である 自由は屈従である 無知は力である』」

からし 「なんとまあ……」

坂岡理 「その国家は『ニュースピーク（新語法）』という新しい言語の辞典を作り出して、国民がその辞典に従って読み書きするように矯正するんです。そして国民がそれまで使っていた言語（英語）を破壊しようとしてる」

からし 「言語を破壊するって？よくわからない……どうして？」

坂岡理 「『ニュースピーク』では、言葉をほとんど簡素化していきます。たとえば『good/良い』という単語さえあれば、反対語『bad/悪い』は不要だと。なぜかって、『ungood/良くない』でことは足ります。だから『bad/悪い』は廃棄処分。『excellent/素晴らしい』という単語は『good/良い』の一語にひっくるめて『plusgood』にしてみえ。なあんだ、『good・bad』にまつわる曖昧な概念の単語はみんな、『good』一語でまとめてしまえるじゃないか。なんと簡便便利で合理的……というものです」

からし 「うーん……馬鹿じゃないのと思うけど、怖



い国ほど、馬鹿じゃないのということを平気です
ると思う。だからけっこうリアルに怖い」

坂岡理 「ほかに、『free自由』という単語は『愛犬デブはシラミからfreeだ』というような言い回しのために残すけれど、『政治的に自由free』とか『思想の自由free』とかいう本来のfreeの概念そのものは削除する。ほかに、略語をたくさん使って本来の言葉の由来や意味を不明にするとか。しかも、ニュースピークの辞典は、次から次へと果てしなく改定される予定で、改定されるたびに辞典はどんどん薄くなっていく。つまり、言葉がどんどん減っていく。この架空の国家は言葉を軽んじる。いや、言葉を徹底的にいじめ、極端に言つと、言葉

を憎むわけ」

家は言葉を軽んじる。いや、言葉を徹底的にいじめ、極端に言つと、言葉

からし 「そうすると、いったいどんなことが起こるの？」

坂岡理 「逆に質問します。からしちゃんは、どうやってものを考えますか？」

からし 「えっと、そうだな……わたしは頭の中で、

ぺちやくちやおしゃべりしてるような気がする。自分の中で自分に問いかけたり、答えたり、自分が自分と対話してるような感じ」

坂岡理 「そうそう、自分の中での対話。自分の持っている言葉を総動員して、自分の考えや言いたいことに一番近い言葉を、ああでもないこうでもないって探し出して、組み合わせ、編み出して、そうしてものを考えている。だから、持っている言葉が少ないと、考えが深まらない。だからと細やかなコミュニケーションをとって、対話したり、



おもんばかりだったり、交流したりすることもできなくなる。もしそういう国民ばかりだったら、どうなるでしょう？ある種の権力者には、とっても都合がよいよね」

からし 「そういうことか……でも、これは今の世界にも当てはまる話かも。この政治家は、国民に對してという前に、言葉に對して不誠実だなあ、と思うことあるもん。あ、それから、『子どもたちには、小説なんかより、機械や道具の説明書がちゃんと読めるようになる国語教育が必要です』みたいなことを言う人がいます。文学作品なんか、教科書から削れとか」

坂岡理 「それは全然違うと思います。感性を磨いたり、生きる意味を考えたりするために、文学は国語の教科書の中であって、とても大切な教材だと思ふよ。それに、日本語はとても細やかで美しい、そして豊かな表現ができる奥深い言語だと思います。今、俳句が流行ってるけど、俳句の季語なんて、『1984年』の国家だったら、歳時記ごと廃棄処分になるだろうね。美しい言葉をたくさん持っている人は、美しい財産を持っているのも同じ。良質な言葉を紡いで豊かな表現ができる人は、深くものを考えたり、想像力を働かせたり、他者の気持ちをくみとったり、暮らして生き方を豊かにすることができると思ふ」

からし 「それは素敵！」



皆様 メリー クリスマス!

ワークス

主任 鍋島愛信
(社会福祉士)

この1年もからしだねワークスの活動に注目し、応援してくださり有難うございます。

2020年が終わろうとしています、振り返ると今年はいろんな意味で特別な1年だったことは全ての人たちの共通の印象だと思います。昨年の今頃は新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延など想像もしていなかったことですが、新型コロナウイルスのもたらした影響は計り知れません。1年で社会がこんな風になってしまうんですね。

からしだねワークスが就労支援事業として運営してきた「カフェ・トライアングル」は4月の緊急事態宣言以来、現在に至るまで営業を自粛しています。一方配食サービスは、山科・醍醐地域にお住いの一人暮らしの高齢者を中心にお昼のお弁当を配達し、安否確認でお声掛けをしていますが、こちらはコロナ禍の中での必要性は高まり、なんとか継続できるよう感染防止対策を徹底し、工夫して続けてまいりました。その他どれも仕事の受注量は減り、大変苦しい状況が現在まで続いています。そんな中でも月々の工賃を維持し、仕事の量を確保するために職員一同必死に踏ん張り、工夫をして取り組んで来しました。

ワークス利用者の方にも変化がありました。自宅待機中に自分自身を見つめ直す機会になったのか、就職に向けて一歩踏み出される人、働くことができる喜びを味わわれた人、もちろん落ち込んだ人たちも多かったと思いますが、なんとか前を向いて頑張っておられます。

今は「CLCからしだね書店」ブック・カフェのスタートに向け、協力して準備に取り組んでいます。利用者の一人ひとりの存在が活かされ、新しいつながりや交流にこの場が用いられるようにとの願いと祈りで頑張っていきます。

これから注目ください!
ご協力お願いします!
ぜひ一度お越しください!

からし「ところで、インターネットのツイッターとかフェイスブックとかの言葉はどう思っていますか？」
坂岡理「SNSにはSNSの役割があると思う。私にはちょっと苦手な分野だけど、からしだねもSNSを使ってどんどん発信していきたいです。ただ、やっぱり言葉を大事にしている人たちの表現力は洗練されている。そして豊かです。じわーっとくる見事な表現に出会ったときは、こころの芯から震える。良い作家の書いた本は、作家が何度も推敲を重ね、編集者の客観的な目が入るという手間暇がかかっています。まさに至極の一冊なわけですね。」

からし「SNSはSNSとして情報の発信や収集、コミュニケーションのひとつの手段として便利に使って、暮らしに役立てましょう。でも、できるだけ質の良い言葉があふれている本を読みましよう。そして、からしだね書店に来て、実際にそこにある本を手にとって、本の手触り、臭い、装丁を楽しんでね、ってことですね。無茶苦茶要約すると、理事長の言いたいのは」
坂岡理「ちょっと乱暴な気もするけど、ま、そういうことかな。言葉をたくさん持つことで、思考できる。思考できるからこそ、家族や友人、い



デ「わん!」

ろいろな人たちと対話できる。『ちびくろサンボ』が良い本なのか悪い本なのかもとことん議論できる。そして、良い本だと思ふ人と悪い本だと思ふ人とか、お互いになんでそう思ふのかを知る。手をつなげる場所がないかなと探す努力をする。からしだね書店は、そんな対話ができる、ときに熱いけど、いいかげんにまったりほっこりできる、薄利だけどいっぱい儲けて、いっぱい工賃を生み出す、欲の深い書店を目指します」
からし「……とのことですので、皆さん、溺愛犬デブにも会える(かもしれない)からしだね書店に、ぜひおいでくださいな!からしちゃんも待ってるよ!」

7

<2020年6月~2020年10月>

「社会福祉法人ミッションからしだね」は、地域で暮らす障害者の福祉はもとより、社会の様々な課題に積極的に取り組んで行こうとしています。後援会はこの働きを支えることを目的としています。ぜひご協力ください。からしだねの機関誌の他ブックカフェの情報、催し物のご案内などをお届けします。

【ご寄贈者様】

朱常分店様
徳田恵理子様

【助成金】

オペレーション・プレッシング・ジャパン様

愛恵福祉支援財団様

【後援会ご支援ご協力者様】

出村紫野舞様
鍋島泰雄様 鍋島久代様
砂川晋治様
勝本博子様
飯田妙子様
岡美智代様
和田義則様
林貞子様
大川史様
佐倉富男様
蒲池國光様
藤野美弥子様
沙原茜様
株式会社田中工務店様
多田出佳代子様
京野隆之様
工楽康代様
矢嶋喜美子様
姫野真知夫様
寺井直江様
森本典子様
櫻井郁夫様
うさぎファーム 宮崎佳文様

森尚江様
坂本正路様
山下愛子様
加瀬裕子様
前川洲子様
砂川孫四郎様
倉信範子様
脇巖様
河島朝子様
茨木恵子様
砂地一廣様
松本美穂様
高宮郁子様
竹村富士雄様
中野富美子様
貝出久美子様
近藤宏様 近藤栄恵様
細見忠雄様
鈴木有様
水野健様
青田勝彦様 青田恵子様
田中康夫様
湊つね子様
三谷洋子様
本多倫子様
山崎春幸様
小柴順子様
河原良治様
榎土正人様 木村明美様
藤原まさ子様
宮崎和子様

山根ひろみ様
生川鉄兵様
萩原武様
新山和子様
杉野保子様
近藤隆之様
内山映子様
北村武司様 井上清治様
井上結果様 井上志穂様
村岡武様
松田和代様
宮田咲子様
井上京子様
松永美保子様
野崎康明様
江口真理様
川合くみ子様
加藤哲也様
石原祐子様
青木秀次様
大窪美祈様
レディースメンタルクリニックの渡
山本裕子様
広岡貞之様
谷暢宏様
モリユリ・ミュージック・ミニストリーズ
森祐理様
北村優子様
森川恵子様
岩田吾朗様
三浦良夫様
武山美登里様

酒井義信様
玉田貞子様
大嶋沙綾子様
松栄純子様
濱名正子様
北村洋様
原口熱美様
石川裕二様
岸川萌木様
イマヌエル福音伝道
京都伏見基督教会様
山本真実様
那須佳子様
清水昇蔵様
中村博子様
柴田珠江様
原潔様
辻貴子様
松本聡子様

【マスク・ガウンプロジェクトへのご寄附者様】

中村武子様
中川慶子様
平越真澄様
岩田吾朗様
泉洋一様
匿名様2名
(順不同)

【ご寄附者一覧】

寺田淑子様
株式会社エナテクス様
出村紫野舞様
三好徳昌様
鍋島泰雄様
松下幸子様
田中リサ様
京都復興教会様
藤田明子様
中野博子様
松盛澄男様

万が一、漏れがございましたらご一報くださいますよう、よろしくお願いいたします。

後援会にご協力を...

年会費	個人様	1口	3,600円
	団体様	1口	10,000円
会費振込先	郵便振替 口座番号：00970-2-222380		

書店の開店と、運営のためのご支援も
よろしくお願いいたします！

後援会入会・継続には、同封の振込用紙をご利用ください。
寄付金控除領収書をご希望の方は、振込用紙の通信欄に「寄付用領収書希望」とお書きください。

加入者名：社会福祉法人ミッションからしだね後援会

※既にお振込みいただいている会員様は、お見過ごしてください。

(編集後記)

2020年は、私達が経験したことのない、どうしたらよいのかわからないことの連続でした。からしだね館の関係者からは、まだコロナウィルス感染者は出ていませんが、第3波の波に飲みこまれつつある今、「with コロナ」をどう解釈し、どう行動すればよいのかは、まだまだ模索中です。そんな中で、からしだねワークスはブックカフェにチャレンジしようとしています。コロナ対策についても話し合い、万全を期してオープンの日を迎えたいと思っています。この事業が軌道に乗り、多くの方たちをうるおす場となりますようにお祈りください。皆様、くれぐれもご自愛ください。そして、

あたたかなクリスマスと幸多い新年をお迎えください。[M.S.]

良い年になりますように...
多くのご支援、皆さまほんとうに、ありがとうございます...

ZZZZZ

